

特集

『福井で社会福祉士として頑張ってます！！』

石田 真一

福井市 福祉部 障がい福祉課

1. はじめに

総合リハビリテーション学部社会リハビリテーション学科1期生の石田です。

今回、神戸学院大学総合リハビリテーション学会誌に卒業生として寄稿してもらえないかというお話をいただきましたので、私なりに大学以降のことを振り返るとともに、社会福祉士として思うこと、今の社会リハビリテーション学科の学生さんへ伝えたいことなどについて書かせていただきましたので、温かい目で見えていただけると幸いです。

2. 世界が広がった大学時代

まず、大学時代について少し振り返ります。大学入学当初は『ソーシャルワークって何?』という感じで講義よりアルバイト優先でしたが、3回生の時に3か月間の社会福祉現場実習があり、私は神戸市須磨区にある高齢者・障害者の施設での地域福祉実習を2か月間、福祉先進国であるスウェーデンにおいて高齢者・障害者の施設を見学するとともに社会福祉・社会保障制度について学ぶ海外福祉実習を40日間経験させていただき、ソーシャルワークに対するイメージが強く湧き、意欲が高まったと思います。

また、大学生活においては、大学洋上セミナーという事業に参加し1か月間船旅をしたり、海外NGOの活動でフィリピンのジャングルで井戸掘りをしたりと大学生の間でしかできない経験を積む

ことができました。

肝心の勉強の方はというとさっぱりでしたが、先生方から熱いご指導をいただいたおかげで社会福祉士、福祉住環境コーディネーター2級、ホームヘルパーなど多くの資格を取得し、卒業することができました。

3. 福祉用具レンタル・販売を行う企業に就職

卒業後は実家がある福井県に戻ることは決めていましたが、『社会福祉士として一般企業で社会の荒波にのまれてみるのもいいかな』と思い、福井県内で福祉用具のレンタル・販売を行う企業に就職しました。

職種は営業でしたが、居宅介護支援事業所や特別養護老人ホーム等の介護保険施設を回り、福祉用具を必要とする利用者の獲得のための営業活動を行うだけでなく、利用者宅に福祉用具を搬入し操作説明をしたり定期的なモニタリングやカンファレンスへ参加したりすることも業務でした。

介護保険でレンタルする機器は認証(TAISコード)が必要であるため、既製の福祉用具の中から利用者や介護者に合うものを提案し利用者の体格や障害に応じて調整していかなければなりません。そのため、重度の障害がある方や進行性の病気がある方の場合には頻繁に訪問し、その時点での適切な福祉用具への変更・調整していく必要があり大変でしたが、介護者やケアマネジャーから「これを使ってから拘縮が改善された」「穏やかに過ごすことができた」「介護の負担が減った」など嬉しい声

をいただくことが自分の仕事に対するやりがいに繋がっていたと思います。

4. 福井市役所への転職

『お客様の笑顔のために』という会社のスローガンの下、自分の利益よりもお客様の利益を優先して仕事をしていましたが、営業としての目標（ノルマ）があるため、会社の利益も考えなければならぬことに対しての葛藤があり、『ノルマがなくてお客様の笑顔に出会える仕事＝福祉系公務員になろう』という考えで入社から2年後の2011（平成23）年4月に福井市役所へ転職しました。

① 地域福祉課で生活保護ケースワーク業務

最初の配属は地域福祉課で、業務としては生活保護のケースワーク業務でした。福井市は世帯数約10万世帯、人口約27万人、そのうち生活保護世帯は当時約1,600世帯であり、全国的にみると保護率は低いですが、それでも当時はリーマンショック以降の不況でほぼ毎日のように生活保護に関する新規相談がありました。

私は毎年約130の生活保護世帯を担当し、生活保護費を支給したり、家庭訪問し生活状況の聞き取りや就職活動の支援のためハローワークに同行するなど生活の自立に向けた支援を行っていました。

生活保護を受給するに至った理由は、病気、離職、借金、犯罪などさまざまで、その一人一人が背負ってきた人生に向き合うのはとても大変であり、そこから抜け出すには本人のエンパワメントとケースワーカーの根気強さが必要となります。時にはギャンブルで保護費を使い果たしてしまったり、再犯で逮捕されてしまったりなど支援が振り出しに戻ることもありました。ケースワーカーはその現実をありのまま受け入れ、支援計画を立て、寄り添いながら支援をしていかなければなりません。

新米のケースワーカーの頃は、自立が可能な生

活保護受給者をむやみに叱責することもありましたが、叱責をしたとしても『その人の気持ちがマイナスに向かう』→『自立への意欲が薄れる』→『生活保護から抜け出せない』という負のスパイラルにしかならないことに気がつき、大学時代に習ったF. バイスティックの『ケースワークの七つの原則』に立ち返り、支援の組み直しをしたのを覚えています。

また、生活保護を受給される方の中には身寄りがいない方も多いため、家庭訪問をしたら家の中で亡くなっているのを発見したり、最期を看取り葬祭や家財処分を行うこともありました。

ケースワーカーという仕事は、福祉用具のレンタルの仕事より生活保護受給者（市民）の笑顔に出会うことは少なかったですが、出会った一人ひとりの人生そのものに深く寄り添い、ケースワーカーの支援次第でその人の人生を大きく変えることができるという点ではとてもやりがいのある仕事だったなと思います。

② 子ども福祉課で児童相談業務

4年間地域福祉課で勤務し、2015（平成27）年4月に子ども福祉課に異動になりました。子ども福祉課での担当業務は児童虐待を含む子どもに関する相談業務や要保護児童対策地域協議会に関する業務でした。

児童虐待に関する業務は、近隣住民や園・学校などの関係機関から児童虐待の通報があると相談歴や家族構成等について確認した上で受理会議を行い、児童相談所と連携して児童の安全確認をするとともに必要に応じて一時保護をしなければなりません。

安全確認をする際には、アザなどの身体的虐待の有無だけでなく、ネグレクトがないか、暴言などの心理的虐待がないか、これまでに気になることがなかったかなど詳細に聞き取りをしなければなりません。児童といっても0歳から18歳までが対象であり、かつ、虐待を受けて動揺している場合

があるため、その年齢に応じた質問をするとともに、尋問にならないようリラックスした雰囲気を作ることが求められます。

また、安全確認後には児童相談所の職員とともに家庭訪問し、保護者から虐待に至った経緯や子どもに対する思いなどについて時間をかけて聞き取り、今後の方針について説明をしていくことになりますが、児童相談所の職権で一時保護をすることになった場合などは「虐待なんかしていない」「子どもを早く帰せ」などと反論する保護者もいます。そんな時に市の虐待対応職員としては保護者の思いをまず受容し、感情を理解しつつ、支援を意識しながら保護者の感情に適切なかたちで反応することが重要になります。

虐待通報のうち約 8 割は一時保護をすることなく、保護者のもとで生活を続けることになるため、定期的に家庭訪問や電話連絡をし、家庭環境の変化や悩みを聞き取り、必要な支援に繋げていますが、虐待は支援者がいない家庭内で起きるため、なかなか実態はわかりません。そのため、要保護児童対策地域協議会の個別ケース検討会議を定期的に開催し、家庭に関する情報の共有と今後の目標の確認、役割分担を行っています。

その要保護児童対策地域協議会には守秘義務が課せられているため、個別ケース検討会議では園・学校・相談機関・児童相談所・障害児通所支援事業所・民生児童委員・医療機関・保健センター・弁護士など多くの方からご意見をいただくこととなりますが、会議の主催者として、誰もが意見を言いやすく、また、誰かを批判することがないように配慮しながら、各機関で行っている支援をあと一步前に進めるための折衝を行う能力が必要になります。要保護世帯からの終結の判断をすることは容易ではないため、多くのケースが1~3年など長期に渡って支援をする必要がありますが、関係機関が一丸となって目標に沿った支援を行い、終結を確認できた時は大きな達成感を得ることができます。

当時は、日中は家庭訪問や電話連絡・ケース会議

の開催に時間を要し、ケース記録は時間外に作成しなければならないため、肉体的にも精神的にも大変でしたが、保護者から『石田さん！！子どものことがムカついて手を出しそうになってきたでちょっと話を聞いて』と虐待に至る前に私をわざわざ指名してSOSを出してくれたり、関係機関から『石田さんのおかげで家庭が円満に回っているようです。子どもも毎日笑顔で登校できています』『なんかあったら石田さんに電話をかければ何かアドバイスをくれる』との連絡をいただけたりはした時はこの上ない喜びを感じることができ、5年間働きがいがある仕事をすることができました。

③ 障がい福祉課で障害児支援業務

子ども福祉課で5年間の経験を積み、2020（令和2）年4月に障がい福祉課に配属になり、1年目は障害福祉サービス事業所の指定・実地指導・監査に関する業務を担当していました。これまでやってきたケースワーク業務からは少し離れ、障害者総合支援法や児童福祉法などの法律や厚生労働省令、解釈通知などを理解した上で適切な事業所運営や報酬算定について助言指導をしなければならず、いきなり専門的な知識を求められる業務でした。

福井市においても全国と同様に共同生活援助（グループホーム）や就労継続支援B型、放課後等デイサービス事業所のニーズが増えており、事業所数も増えていますが、それに伴って事業所の質の低下が大きな課題になっています。不正が疑われる事業所に対しては監査をし、改善勧告・改善命令を行い、それでも改善されない場合や明らかな不正行為がある場合は、指定の取り消し等の行政処分を行う必要があります。私も担当者として不正の取り締まりを行っていましたが、行政処分を行うということは事業者だけでなく利用者にとっても不利益が生じてしまうことになるため、できるだけ不正に至る前に事業所への丁寧な説明と指導を行わなければならず、とても神経を使いました。

2 年目からは児童発達支援や放課後等デイサービスなどの障害児通所支援の支給決定業務を担当しています。近年は ASD や ADHD、LD などの診断をもって障害児通所支援事業所を利用する児童が増えています。障害児通所支援はあくまで療育を行う場であり、児童クラブのような預かりの場ではありません。そのため、需要と供給のバランスを見ながら必要な日数や時間の支給決定を出しています。

また、担当するケースにおいては、不登校やひきこもり、医療的ケア、強度行動障害など障害児やその家族が抱える課題は多様化・複雑化しており、園・学校等の所属機関だけでは対応に苦慮するケースが増えているため、障害児通所支援事業所の児童発達支援管理責任者、障害児相談支援事業所の相談支援専門員、医療機関の医師や医療ソーシャルワーカー、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士などさまざまな方にもケース会議に参加してもらっています。ケース会議を司会進行するにあたっては、全員が発言する機会を設け、関係機関が肯定的なアイデアを出せるよう配慮しています。時には、支援に行き詰まることもあります。客観的にとらえてみたり、保護者の立場だったらどう思うだろうかということに参加者全員で意識したり、定期的に方向性の確認を行ってみたりすることによって課題解決に向かうことができるケースが多くなりました。

今年度は上記の業務に加えて、障害者自立支援協議会において地域の障害児・障害者に関するさまざまな課題について議論するとともに必要に応じて事業を企画・予算化をする業務や医療的ケア児支援コーディネーターとしての相談業務、2024(令和6)年度に行われる障害福祉サービスの報酬改定に向けて厚生労働省の担当者と意見交換を行うなど忙しい毎日ですが、自分の関わりが障害児の現在・未来に大きく影響することを肌で感じているため、使命感・やりがいを感じながら楽しく仕事をしています。

5. これまでを通して大学での学びがどう活かされているか

今回、寄稿のお話をいただき、久しぶりに大学時代の教科書、講義ノートを見返してみました。大学当時は、まさか自分が福祉用具、公的扶助、児童福祉、障害福祉に関わる仕事をするとは思っていませんでした。教科書等にはマーカーが引いてあるものの具体的なイメージまではできていませんでした。しかし、改めて読み返してみると、大学時代に専門職に必要な基礎的な知識を教わっていたことが、今の仕事に生かされていることを実感しています。

特に、社会福祉援助技術については、大学を卒業して以降誰かに教わることもないですが、大学時代に学んだ技術が自分の中に染み付いているため、市民、関係機関に対して実践できていると思います。

今後は、大学時代に学んだことをさらにブラッシュアップしていかなければと考えています。

6. 今の学生に伝えたいこと

現在、福井市役所では福井県立大学など近隣の大学から社会福祉現場実習として実習生を受け入れ、私も実習指導者としてスーパーバイズを実践しています。その実習生にも伝えていることとして3点あります。

まず1点目は、『今の学びはいつかきっと支援を必要とする人の助けになるため、1日1日を大切に、学びを深めること』です。社会人になると、大学生の時のようにしっかり勉強したり、いっぱい遊んだりという時間はなくなります。社会福祉士になるための勉強はもちろんですが、ボランティアやアルバイト、旅行、恋愛などいろんな経験すべてが社会人になってから生きる時が必ず来ます。そのため、今しかない限られた時間を有意義に使ってほしいと思います。

2点目は、『社会福祉は幅が広く奥が深いので、自分に合うものは何なのか追求すること』です。大学では社会福祉の基礎を学び、社会福祉現場実習では限られた分野での実務体験に留まりますが、社会福祉の仕事は多岐に渡りそれぞれ非常に奥が深いです。いろんな分野を見聞し、自分の能力が最大限発揮できる仕事はなにか探求してほしいなと思います。

3点目は、『仕事がうまくいなくても必ず「今日一日いい仕事をした。人の命を救った」と自分に言い聞かせ、仕事が終わったらストレス発散をすること』です。社会福祉士の仕事はすぐに結果が出るような仕事ではありません。それどころか、仕事によっては誰からも評価してもらえず、クライアントから批判されることもあり、精神的に追い詰められ病気休暇を取る職員もいます。そうならないためには、まず自分をセルフマネジメントできなければなりません。私は、職場を一步出たら『今日一日いい仕事をした。人の命を救った』と思うようにし、仕事のことは一旦忘れるようにしています。また、休日は息子と温泉に行ったりキャンプをしたりしてストレス発散しています。学生の皆さんも今のうちから自分にとって何が一番ストレス発散できるか研究をしておくといいと思います。

7. 終わりに

長々と書かせていただきましたが、振り返るともう社会人14年目にもなるんだなと驚きを感じるとともに、社会福祉士としてはまだまだ未熟だなと改めて認識したところです。

最近は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い保健所の応援派遣があったり、自然災害時には避難所を運営しなければならなかったりするなど、本来業務以外の仕事もありますが、それらの業務の中にも社会福祉士だから気づける視点、改善できる視点があるなと感じています。

常に初心を忘れず、常に問題意識を持ち、常に向

上心を持って、今後も社会福祉士として市民のため仕事をしていきたいと思います。

最後に、今回このような機会を作っていただいた社会リハビリテーション学科の先生方に深く御礼申し上げます。ありがとうございました。